

カンボジアの子どもたちの歯を守り15年 14000人を健診・治療 復興の力に 紙芝居手作り 学生も活躍



開放廊下に出して、小児歯科医による歯科健診(2019年3月)



児童、先生方、保護者と共に(2016年3月)



家庭訪問先の子どもたちと(2015年2月)



新年のご挨拶

病院長 安達 伸生



新年あけましておめでとうございます。皆様には、清々しい年の始まりを迎えられたことと思います。

2024年は今も大きな傷跡を残し、多くの住民の方々が自宅に帰られない生活が続いている能登半島地震で明けました。広島大学病院は医師や看護師、臨床放射線技師、薬剤師たちを計11回にわたって派遣し、被災者に寄り添いました。また東日本大震災で被災した福島県の医療支援のため、2016年から3カ月交代を基本に内科系医師を延べ33人、救急医を毎月1週間派遣を続け、福島の医療の維持と復興に貢献しています。

医師の時間外労働の上限規制の適用も始まりました。院内では様々な工夫をして、患者さんにご迷惑やご心配をかけないように努めています。文部科学省の「高度医療人材養成拠点形成事業－タイプA」にも、中四国地域で唯一、事業採択されました。2024年から6年間、毎年8000万円が補助されます。広島大学病院では、研修医に早い段階から専門性への足がかりを提供する一方、診療スキルを磨き、キャリア支援や研究の充実、働き方改革にもつなげます。

私は整形外科医で、プロを含め多くのスポーツ選手の治療をしてきました。本院から再起を果たした選手が活躍すると、身内のことのようにうれしくなります。広島東洋カープは昨シーズン、リーグ終盤の9月に失速し、残念な結果に終わりましたが、今年こそは2018年以来の優勝を果たしてくれるよう期待しています。新型コロナ禍にあって病院前で医療従事者を激励してくださったサンフレッチェ広島の選手の皆さんは、最終盤まで優勝争いを繰り広げました。昨年、小児病棟を訪れ子どもたちを励ましてくださった朝山正悟さんが監督に就任した広島ドラゴンフライズも連覇を目指して頑張っています。

人生100年時代を迎え、多くのシニア世代がスポーツを楽しみ、健康増進を図っています。生活習慣病や認知症の予防、改善も期待されます。体を動かすと、気持ちも上がります。広島大学病院スタッフはチームプレーで、地域の皆さんの健康を支えていきます。本年も皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

皆様にとって実りの多い1年となりますよう祈念して、新年のご挨拶といたします。



カンボジアの子どもたちの歯を守り15年

14000人を健診・治療 復興の力に

広島大学病院の歯科医師や歯科衛生士が、カンボジアに渡り、子どもたちの歯のケアを続けて15年になります。「子どもたちのむし歯がひどい」という声を、先駆けて活動していた医療チームから聞いたのがきっかけです。歯を守ることが健康に、ひいては国の復興にもつながるという意識が広がりつつあります。

広島大学歯学部が、NGOひろしま「アジアの子どもの歯を守る会」、現地の大学歯学部などと協力して、2009年に支援活動を始めました。学生や一般市民を含め30人前後が渡航して行う現地活動は、これまでに15回を数え、歯科健診や治療をした子どもたちは約14,000人にのぼります。広島大学病院小児歯科の岩本優子医師は、打合せ等も含めると15年間で19回の渡航を重ね、力を尽くしてきました。

「チョムリアップ スオ(こんにちは)」。あいさつすると、先生や子どもたちが合掌して出迎えてくれます。2024年3月に訪れたカンボジア北西部シェムリアップ州の小学校。授業の合間に子どもたちを開放廊下や木陰に呼び、「あーん」の代わりに「ハーモア(口を開けて)」と声をかけます。膝の上に寝かせて、懐中電灯で照らして診査したり、歯ブラシの使い方を指導したり。

今回は、小児歯科をはじめとする歯科医師や歯学部の学部学生と、カンボジア人のスタッフ計23人が1週間の日程で、4小学校とヘルスセンター(保健所)などを巡回。保健指導や歯科健診、フッ化物塗布などをしました。



広島大学歯学部国際歯学コース学生による
歯みがき指導(2019年3月)

多くの子どもに問題

支援活動を始めた当時、メンバーは子どもたちの歯の状態にショックを受けました。たくさんの歯がむし歯で根元近くまで溶けてしまっている子、あちこち歯が抜けてしまっている子や、それが原因となってかみ合わせが悪くなってしまっている子など、多くの子どもが口の中に問題を抱えていました。

背景にあるのが1970年から1993年の内戦です。特に1970年代後半に150万人から200万人と、人口の約4分の1が犠牲になる大量虐殺が行われました。そして、復興を大きく妨げた要因は医師や教師、技術者など知識人をターゲットにした虐殺でした。教育や医療が崩壊し、生き残ることができた歯科医師は国内でわずか数十人しかいなかったと言われています。歯科医療は行き届かず、家庭や学校教育現場で歯みがきなどの基本的な歯科保健を学ぶ機会がほとんどなかったのです。

悪循環は次世代にも続きます。教育を受けられなかった親世代が子どもたちを育てており、6歳児の4割、12歳児の2割が「歯みがきをしたことがない」という報告があります。むし歯が進んでも自費診療のうえ、最も安価な治療法は抜歯であり、乳歯であれば基本的に放置。一方で、経済成長によってスクロース(ショ糖)の摂取量が増え、多くの子どもたちで深刻なむし歯が放置されてしまっています。



校庭での紙芝居(2010年3月)



乳歯の奥歯にむし歯のある子ども(2024年11月)



手作りのパネルシアターで歯科保健指導
(2024年11月)

■ 電気も水道もない 手探りでスタート

支援活動は手探りでスタートでした。医療チームが内科健診などを実施していた小学校を訪れ、歯科健診や歯石の除去、できる範囲の治療をします。電気も水道も通っておらず、太陽の光で口腔内を診るために机やイスを屋外に置いて、即席の診療スペースに。生まれてから身体測定すら経験がない子どもたちはおっかなびっくり。数年かけて、ようやく笑顔で迎えてくれるようになりました。

現場ニーズに応える中で、保健教育の重要性に気がきました。力を入れたのは、小学校教員を対象にした研修です。教室で読むだけで、子どもたちにむし歯予防の大切さが伝わるよう、現地語のクメール語で、ウサギが登場するなど6種類の紙芝居を制作。甘いものを何度も摂りすぎないこと、ブラッシングや口の健康の大切さなどを伝えます。学校の売店で文具と菓子の売り場を分けたり、おやつ回数を考えてもらったりもしました。



紙芝居を使って歯科保健指導 (2024年11月)



小学校教員養成校で歯科保健指導の模擬授業 (2015年2月)



小学校教員養成校での歯みがき指導の研修 (2019年3月)



文具と菓子が一緒に並ぶ小学校の売店 (2010年9月)

■ 留学生や現地スタッフが力に

大きな力になったのが、カンボジア人スタッフです。活動の当初から、カンボジア保健省や現地の大学歯学部のパックアップもあり、歯学部生や広島大学に留学中の学生もメンバーとして参加してもらっています。留学生には、紙芝居の制作や翻訳にも力を借りました。

ただ大学に進学したり、留学したりできる学生は都市部で育った富裕層の割合が高く、農村部の状況には疎いのが実情です。そこで、学生たちとは国全体の歯科事情を良くしていこうという目標を掲げました。

近年は広島大学を卒業してカンボジアに帰国したメンバーも増え、指導を任せられるようになってきています。新型コロナウイルスによるロックダウンで、一時は収入がなくなった歯科医師もいたそうですが、そんな状況にあっても物資をかき集め、困っている人に支援を届けていたそうです。

まだまだカンボジアは厳しい現状にあり、今後は活動の主体を現地のメンバーにバトンタッチし、バックアップに回るのが目標です。一方で、割合は少ないものの、広島大学病院の患者にもカンボジアの子どもたちと同じような口の状態にある人が絶えません。広島でもまだまだ、むし歯にならない知識を広めていく必要はありそうです。



コロナ禍でカンボジアスタッフのみで活動 (2022年4月)



アンコールワット (2009年9月)

キラキラした笑顔が励み



いわもと ゆうこ 岩本優子 医師の話

もともと子どもが好きで、活動を始めました。生活も教育環境も厳しいのに、子どもたちの屈託のないキラキラした笑顔が大きな励みになっています。当初から毎年通っている小学校では、むし歯の割合が減ってきているのにも手応えを感じています。次世代にはむし歯がなくなるよう、息の長い支援をしていきたいです。

看護師 プラス

看護師の業務が拡大しています。「専門看護師」「認定看護師」は高度化・専門化が進む医療現場でレベルの高い看護を実践できる看護師に認められた資格です。いずれも日本看護協会が認定しています。

専門看護師は、看護師として5年以上の実践経験を持ち、看護系大学院で修士課程を修了して必要な単位を取得したのちに、専門看護師認定審査に合格することで取得できる資格で、13分野。認定看護師は、看護師として5年以上の実践経験を持ち、日本看護協会が定める600時間以上の認定看護師教育を修め、認定看護師認定審査に合格することで取得できる資格で、21分野です。それぞれの資格を持った看護師がどんな活動をしているのか、紹介していきます。



[専門看護師]

がん看護

山口 真由美

01 どんな仕事？

外来のがん患者さんの治療方針の選択及び意思決定を支援しています。患者さんが生活の中で大切にしていることを踏まえた上で、納得のいく治療の選択ができるように、身体的側面だけではなく精神的、社会的サポートが必要な状況を関係者間で共有し、サポートの方向性を調整しています。また、がんやその治療によって生じるリンパ浮腫のマネジメントに携わり、患者さんが持っている力を引き出し、“強み”に焦点をあててセルフケアが継続できるように支援しています。



02 きっかけは？

患者さんが抱える問題に対して、なす術がなく立ちすくむ経験をし、専門的な知識と技術の不足を実感しました。患者さんの持っている力を信じて引き出し、強みを活かせる看護師でありたいと思い、大学院で学ぶことを選択し、資格を取得しました。

03 将来へ向けて

がん患者さんが納得して安心して治療ができるように意思決定支援、症状マネジメント、精神的・社会的な支援の充実を目指しています。がん看護の質の向上に貢献できるよう院内外で講師を担い、人材育成にも取り組んでいきたいと考えています。



[認定看護師]

手術看護

笹田 祥子

01 どんな仕事？

外科的治療や麻酔技術の進歩により、幅広い年代の手術が可能となっており、患者さんや家族が安全に安心して手術を受けることができるよう支援しています。手術看護の特徴は、術前から術後を通して、手術という大きな侵襲から合併症を起こさずスムーズに回復し、社会生活に復帰できるよう援助することです。診療科医師、麻酔科医師、薬剤師、臨床工学技士など多くの職種と連携し、患者・家族の意向を尊重した周術期医療を提供しています。



02 きっかけは？

手術室配属後、数年は実践能力の向上に努めることで精一杯でしたが、教育的役割を担うようになり看護の根拠を考える機会が多くなりました。より専門性を高めて看護実践を行いたいと考え、2010年に手術看護認定看護師教育課程で半年間学びました。同期の仲間とは、現在も他施設の情報交換や悩みを共有し切磋琢磨しています。

03 将来へ向けて

超高齢化社会を迎えた現代において、手術患者は年々増加の一途となっており、低侵襲手術の進化に伴って、患者さんのQOL向上に寄与できるよう、看護師の更なる役割拡大とチーム医療の推進が求められると考えています。看護師長として、安全の確保と患者へ細やかな配慮ができる人材を育成し、先進の手術環境を提供できるよう手術看護の質の向上に努めていきたいです。



診療科最前線

「内分泌・糖尿病内科」

(診療科長:大野晴也)



明するための研究を新たに開始し、予防や早期発見、治療に役立てることを計画しています。

▶ かかりつけ医との連携

令和元年8月に広島県地域医療介護総合確保事業の助成を受けて広島大学に設立された「ひろしまDMステーション」は、地域の医療機関に通う糖尿病のある人に対し、

メッセージツールなどを活用したネットワークシステムを構築し、生活習慣の遠隔介入を行う研究を進めています。この取り組みは、県内全域で質の高い糖尿病医療を提供することを目指しています。

▶ 診療科の特徴

糖尿病、内分泌疾患、脂質異常症などの診断と治療を専門に行っています。糖尿病診療では、インスリン治療を受けている方や、様々な合併症を持つ方が増加しており、教育入院よりも合併症や併存症の治療を目的とした入院が多くなっています。内分泌診療においては、パセドウ病に対するアイソトープ治療や、市中の病院で対応困難な様々な内分泌症例の診断や治療、必要時には他科と連携して手術への橋渡しや術後の評価およびフォローアップなどを行っています。

▶ 得意分野

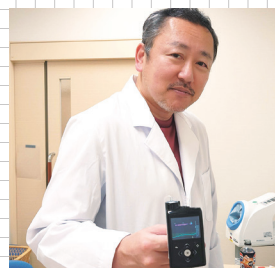
最新のデバイスを活用した糖尿病診療を行っています。持続血糖モニター（CGM）を使用して日々のグルコース値の変動をフィードバックし、血糖調整に役立てる治療や、インスリンの自動注入調整機能を持つCGMとインスリンポンプを組み合わせた治療を積極的に導入しています。

また、がん治療においては免疫チェックポイント阻害薬（ICI）の使用が増加しており、それに伴い免疫関連有害事象（irAE）としての内分泌機能異常の頻度も増えています。広島大学病院では、これらの内分泌障害の原因や病態を解

▶ 新しい動き

肥満症の治療には新たな選択肢が増えています。2024年には新しい注射薬が発売され、広島大学病院では肥満症専門外来が設置されました。内科的治療の困難な肥満症に対しては、消化器・移植外科、消化器内科、栄養管理部、薬剤部と連携し、減量・代謝改善手術の術前評価や術後のフォローアップを行っています。

また、FGF23関連低リン血症性くる病・骨軟化症や低ホスファターゼ症などの希少疾患や甲状腺眼症に対する抗体治療や酵素補充療法も新たに登場してきました。これら最新の治療にも他院とも連携をとりながら積極的に取り組んでいきます。



催しのご案内

(2025年1月～3月)

肝臓病教室

「アルコールと肝障害について」

講師：消化器内科医師 山岡 賢治

「動画を見ながら、みんなでストレッチ!」

(～肝疾患に対する運動療法～上映)

1月20日(月) 15:00～16:00

会場：臨床管理棟3階大会議室

申込：不要(参加費無料)

問い合わせ：肝疾患相談室

☎082-257-1541

(10:00～12:00 13:00～16:00)



がん治療を支える患者サロン 会場：いずれも臨床管理棟3階 3F2会議室/Zoom

最新の肺がん治療について

1月16日(木) 13:30～14:30 講師：呼吸器内科医師 益田 武

がんと食事について

2月20日(木) 13:30～14:30 講師：栄養管理部 管理栄養士 角田 麻子

がん療養中の災害への準備

3月13日(木) 13:30～14:30 講師：DMAT隊員 急性・重症患者看護専門看護師 佐々 智宏

患者おしゃべり会 会場：いずれも診療棟2階 健康情報プラザ

1月28日(火) 13:30～14:30

3月25日(火) 13:30～14:30

申し込み・問い合わせ：がん相談支援センター

☎082-257-1525